

(様式第2号)

| | |
|-----------------|-----|
| 研究No. (記載不要) | — — |
|-----------------|-----|

平成19年度配分 研究成果発表報告書(実績)

| | | | | | |
|-----------------|--|------|----|-------|---|
| 研究名 | 多文化共生社会の実現に向けた静岡県西部地域からの情報発信 | | | | |
| 配分を受けた 特別研究費 | 文化政策学部長特別研究費 | | | | 1700 千円 |
| 研究者氏名 (代表者) | 学部名 | 学科名 | 職 | 氏 名 | 共同研究者 |
| | 文化政策 | 国際文化 | 教授 | 池上 重弘 | 他 3 名 |
| 発表の方法 | 1 紀 要 名 称: 池上重弘.「浜松市民が考える多文化共生－ 協働研究によるシンポジウムの成果報告－」 | | | 号 数 | 第 9 号 (31 頁～ 38 頁) (2009 年 3 月発行) |
| | 2 学会等での発表 学会等名: (1)静岡県文化芸術大学 文化芸術セミナー 「浜松市民が考える多文化共生」 (メンバー全員が報告) (2)The Twelfth Asian Studies Conference Japan (ASCJ) 於立教大学池袋キャンパス (メンバー全員が報告) Inclusion and Exclusion of Immigrants in Japan: A Case of Japanese Brazilian Migrants in Japan. (3)移民政策学会第1回研究会 於立教大学(池袋キャンパス) 池上重弘.「ブラジル人の生活就労実態と 社会統合の課題－静岡県と浜松市の質 問紙調査から－」 (4)ポルトガル語でのディベート－浜松市にお けるブラジル人の生活－於静岡県文化芸術大 学(メンバー全員が報告) | | | 発表日 | 平成 20 年 3 月 23 日 平成 20 年 6 月 22 日 平成 20 年 9 月 28 日 平成 20 年 10 月 11 日 |

| | | | |
|--|---|-----|---|
| | <p>3 その他</p> <p>発表の方法:研究成果報告書</p> <p>池上重弘(編). 2008.</p> <p>『外国人市民と地域社会への参加ー2006 年 浜松市外国人調査の詳細分析ー』静岡文化 芸術大学.</p> <p>イシカワ エウニセ アケミ、池上重弘(編). 2009.</p> <p>『ポルトガル語でのディベートー浜松市にお けるブラジル人の生活ー』静岡文化芸術 大学(研究代表者:池上重弘)</p> | 発表日 | <p>平成 20 年 3 月 日</p> <p>平成 21 年 3 月 日</p> |
|--|---|-----|---|

- ☐ 学会等での発表及びその他の場合は、学会報等発表を証する資料を添付すること。
- ☐ 配分を受けた翌年度の 3 月末までに提出

浜松市民が考える多文化共生
－協働研究によるシンポジウムの成果報告－

池 上 重 弘

静岡文化芸術大学研究紀要抜刷

第9巻 2009年3月

浜松市民が考える多文化共生 ー協働研究によるシンポジウムの成果報告ー

Multicultural Community Building reflected by Hamamatsu Citizens: A Report of the Symposium as an outcome of the Collaborative Research

池上 重弘
文化政策学部国際文化学科

Shigehiro IKEGAMI
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿は、2008年3月23日に静岡文化芸術大学にて開催されたシンポジウム「浜松市民が考える多文化共生ー浜松市外国人調査をもとにー」の成果報告である。そのシンポジウム自体が研究チームと多文化共生活動に従事する市民団体との協働研究の成果であった。

This is a brief report of the symposium carried out on 23 March, 2008 in Shizuoka University of Art and Culture under the title of "Multicultural Community Building reflected by Hamamatsu Citizens." This symposium was an outcome of the collaborative research by the research team and some groups of Hamamatsu citizen engaging various multicultural community building activities.

1. はじめに

平成19年度静岡文化芸術大学文化政策学部長特別研究「多文化共生社会の実現に向けた静岡県西部地域からの情報発信」の成果の一部として、2008年3月23日に静岡文化芸術大学大講義室にて「浜松市民が考える多文化共生ー浜松市外国人調査をもとにー」と題するシンポジウム（以下、本シンポジウム）が開催された。本稿は、その成果について報告すると共に、研究成果がその後どのような展開に結びついたかを報告することを目的としている。

そもそも本シンポジウムは、2006年度に浜松市企画部国際課より受託して「浜松市における南米系外国人の生活・就労実態調査」（以下、浜松市調査）を実施した研究チーム¹⁾によって、その分析結果およびそこからの知見を広く市民に還元することを目的に、SUAC文化芸術セミナーとして開催された。しかし、単なる研究成果の報告にとどまらず、日本語教育、医療や保健、地域社会、外国人市民のコミュニティなどの場面で市民活動に関わっている方々が、調査の分析結果と日頃の活動経験をもとに、多文化共生のあり方について多様な角度から政策提言する機会となった点に大きな特徴がある。

本稿では以下、市民との協働によって研究成果を活用する「協働研究」のコンセプトについて説明したのち、分析結果の概要をまとめる。さらに分析結果と日頃の活動経験を踏まえた市民からの政策提言の内容を紹介し、筆者らの協働研究の展開について最新の状況を報告する。

2. 協働研究のコンセプト

浜松市調査の単純集計結果をまとめた報告書は浜松市国際課より2007年3月に公表され、浜松市のホームページからダウンロードすることもできる²⁾。通常の受託調査はこのような単純集計の報告書を発行して終了することが多い。研究者が受託した場合、データをさらに分析した結果を学会発表し、学術論文としてまとめて学界に還元することもあるが、それが市民に還元され活用されることはまれである。そこで、地元の大学教員を含む私たち研究チームは、そこから歩を進めることにした。つまり、浜松において多文化共生の諸活動に関わっている市民との意見交換を通じて、地域のニーズを反映した分析視点を導入し、統計的手法を用いた実態把握に基づいて施策の方向性を示すことを意図したのである。さらに、分析結果をもとに、意見交換に応じてくれた市民が各々の活動現場での経験を踏まえて政策提言する機会を持った。それが本稿で報告するシンポジウムである。

このように、本シンポジウムは、調査結果をもとにした市民との意見交換から分析のヒントを得ると同時に、分析結果を市民による政策提言の基礎資料として還元するという意味で、研究者と実践者の間における循環的なコミュニケーションの成果を発表する場でもあった。このような研究は、学問の成果を地域社会に還元するという意味で、一方的な知的搾取に終始していない。また大学（ないし研究者）が地域貢献の一環として地域の市民団体と実践活動を展開する単なる協働とも異なっている。そこでこのような研究を「協働研究」と名付けることにしたい。

図1は、本シンポジウムに向けた協働研究の概念図である。色付き部分が協働研究に相当する。2006年度に受託した調査の報告書が浜松市国際課から発行されたのち、2007年7月から9月にかけて、研究チームのうち浜松在住のイシカワと池上が調査結果をまとめたパワーポイント資料を用いながら表1に示す市民団体の会合の折に調査結果を紹介し、

意見交換の機会を持った。これらの会合での意見交換では、雇用・労働、医療・保健、教育、日本語学習、居住、地域生活など、多方面にわたる質問に研究チームが回答し、他方で現場の知見に基づくコメントや指摘を受けることができた。その記録を研究チームで共有し、その後の分析に際して参考にした。

図1 市民参加型の“協働研究”のイメージ図

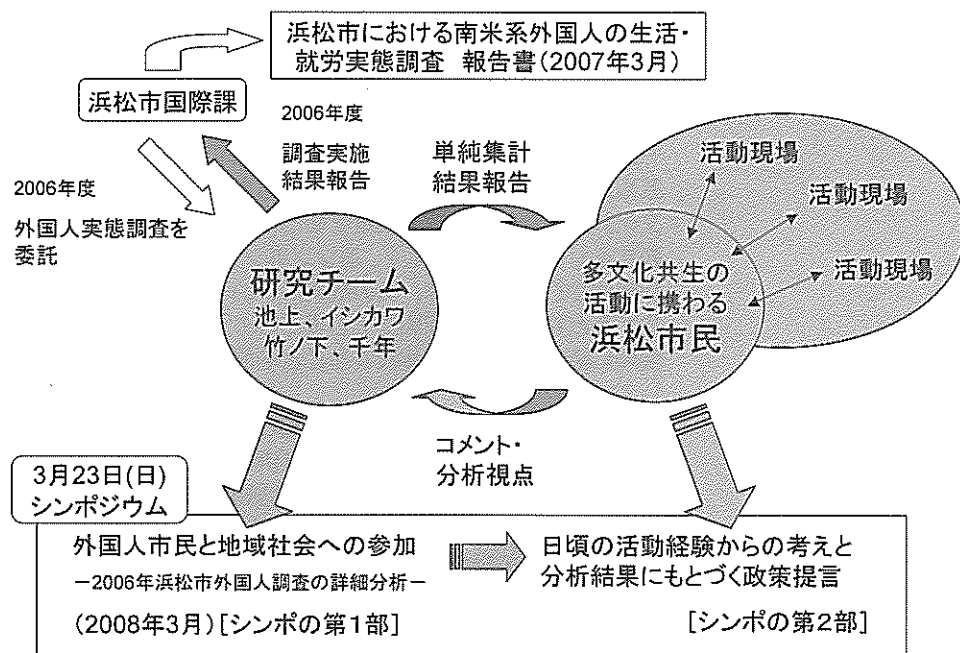


表1 市民団体との意見交換の機会一覧

| | 会 合 | 日時（2007年） | 会 場 | 説明者 |
|---|----------------------------|-----------|----------------|------|
| 1 | 外国人労働者と共に生きる会・浜松（へるすの会）総会 | 7月11日（水） | 静岡県西部地域交流プラザ | イシカワ |
| 2 | 浜松市立砂丘小学校意見交換会 | 8月1日（水） | 砂丘小学校 | 池上 |
| 3 | 浜松日本語ネットワーク準備会 | 8月18日（土） | 静岡文化芸術大学 | 池上 |
| 4 | 平成19年度市町人権教育連絡協議会第2回学校教育部会 | 8月21日（火） | 浜松市教育委員会 | 池上 |
| 5 | 砂丘自治会定例会合 | 8月22日（水） | 砂丘会館 | 池上 |
| 6 | 「共に生きる」教材を考える会 | 8月29日（水） | 浜松国際交流協会 | 池上 |
| 7 | 日本公文教育研究会浜松事務局「日本語オープン自主研」 | 9月12日（水） | 日本公文教育研究会浜松事務局 | 池上 |

3. 研究チームによる分析結果報告

本シンポジウムは二部構成になっており、第1部では研究チームが浜松市調査の分析結果を報告した。その内容はシンポジウムに先立って2008年3月に発行された詳細分析報告書⁹⁾の各章のダイジェストに相当するので、ここではその報告書の3-6ページに掲載されている要旨を転載して報告内容の紹介とする。

(1) 日本語能力の現状と日本語学習の可能性 (池上重弘)

南米系外国人が日本の社会で安定した収入と生活基盤を得る上で、受け入れ社会の言語である日本語の習得は重要かつ基本的な課題のひとつである。本調査の回答者のうち、ほぼ7割の人びとが十分な日本語能力のない状態で来日している。来日後も、多くの移民国や社会統合政策を積極的に展開しているEU諸国のように、初期定住支援施策の一環として日本語学習の機会が保障されているわけではない。この研究では、次の4つの視点から、日本語能力を多角的に分析した。すなわち、①来日前の日本語能力の規定要因、②現在の日本語能力の規定要因、③現在の日本語能力によって規定される生活状況、そして④回答者の属性による日本語学習希望の多様性である。

その結果、①来日前の日本語能力については、年齢層、日系世代深度との関係で統計的な有意差が認められた。②現在の日本語能力については、国籍、日系世代深度、在留資格、日本滞在年数、母国での学歴との関係で有意差が認められた。③現在の日本語能力の違いによって有意差が認められる生活状況としては、雇用形態、被差別感、住宅、今後の滞在予定が挙げられる。④日本語学習希望については、回答者の属性による有意差はあまり認められなかった。今後さらなるニーズの掘り起こしと検証が必要だが、対象や日本語レベルの多様さに応じた多様な学習機会の提供が求められていると考えることができる。

(2) 健康保険の加入状況と課題(千年よしみ)

日本在住の外国籍住民、特に近年増加の勢

いを見せているニューカマーをめぐる問題の一つに、健康保険加入率の低さがあげられる。本稿では2006年に浜松市で実施された「浜松市における南米系外国人の生活・就労実態調査」のデータを用い、外国籍住民の健康保険加入を規定する要因について検討した。保険加入に影響を与える要因は、①個人の基本的属性、②労働条件、③情報収集力、④健康保険の必要程度、⑤日本社会への統合の度合い、の5グループから検討した。同時に健康保険の加入状況が、どのように受診行動に影響を与えるかについても考察した。

クロス表を用いた予備的分析の結果、サンプルの約40パーセントが保険に未加入であることがわかった。また、検討したほぼ全ての要素が保険の加入状況に関連性を持つことが判明した。受診行動についてみると、保険未加入者は最も受診を避ける傾向が強かった。しかし、会社の健康保険加入者は未加入者より受診傾向は強いが、国民保険加入者より受診傾向が強いというわけではなかった。健康保険加入を規定する要因、及び保険加入状況と受診行動との関係について更に分析を進める必要がある。

(3) 子どもの生活環境とアイデンティティ (イシカワ・エウニセ・アケミ)

現在、日本におけるブラジル人は30万人を超えており、そのほとんどが日系人、つまりブラジルへの日本人移民の子孫である。最初の日本人移民がブラジルへ渡航してから100年が経ち、その間日本人移民や日系ブラジル人の自己認識＝アイデンティティは様々な変遷を遂げてきた。日系ブラジル人の多くは、ブラジル国籍を持ち、ポルトガル語を話し、ブラジルの文化・習慣に溶け込んでいると同時に、ブラジルで築かれた「日本人」というアイデンティティを保持している。しかし、来日後、日本での生活において自分たちが持っていた「日本人」としての資質が否定され、今度は「ブラジル人」の意識が強くなる。

本稿では、日系ブラジル人が来日したことによって経験している、アイデンティティの変容過程を分析する。ここでは、浜松市での生活環境に焦点を当て、日系人の家族構成や

ブラジル人コミュニティの状況を紹介し、その環境で育つ日系人の子どものアイデンティティの形成過程を考察する。

親の場合、来日により「日本人」から「ブラジル人」へとエスニック・アイデンティティが変化する。しかし、子どもの場合、このような論理にはあてはまらない。子どもたちの中ではブラジルを直接知らない、もしくは覚えていないケースが多いからである。つまり、子どもたちは日本で、親に教えらるるブラジルをアイデンティティの核としている一方、日本社会への適応過程において、今度は日本人としてのアイデンティティが芽生えてくると考えられる。

(4) 人づきあいのあり方と精神的健康 (竹ノ下弘久／西村純子)

移民の社会学的研究の多くは、繰り返し、移民が移住先社会で生活を形成するとき、かれらの人付き合いのあり方、人間関係から必要なサポートを調達する能力(社会関係資本)がきわめて重要な要素であることを強調してきた。本研究は、浜松市に居住する南米系外国人が、いかにして必要なサポートを社会的ネットワークから調達しているのか、どのような人が、そうした相互に支えあう関係から阻害されているのかについて、明らかにしたい。具体的には、南米系外国人の人付き合いのあり方が、かれらの精神的な健康状態(ストレス)にどう影響しているかに注目する。

分析の結果、次の点が明らかになった。第1に、南米系外国人の親密な人間関係は、同国人に限定されており、日本人との間にそうした関係が作られているケースは非常に少なかった。第2に、かれらが取り結ぶ人間関係は、概して閉鎖的な傾向がみられた。かれらが親しくする3人は、3人とも相互に知り合いであるという回答が非常に多く、かれらの付き合いの幅は、概して狭く閉鎖的な傾向がうかがえる。第3に、そうした人付き合いのあり方と精神的健康との関係についてみると、より閉鎖的な人間関係をもつ人ほど、親族との付き合いの多い人ほど、精神的な健康状態が良好である傾向がみられた。家族や親族とのより強い絆が、ソーシャル・サポートの利用可能性を高めているようである。他方

で、家族や親族との強い絆をもたない南米系外国人も存在する。今後は、そうした家族や親族との強い絆をもたない外国人同士の間に、どのようにして相互に支えあう関係を形成できるかを、考えていく必要があるだろう。

4. 市民からの政策提言

本シンポジウムの第2部では、意見交換に応じた市民団体の代表とブラジル人市民からなる4人が、調査結果と日頃の活動経験を踏まえて多文化共生をめぐる政策を提言した。このうち、文書での提言のあった3人について発言骨子を記す。

(1) 外国人児童生徒への日本語学習支援について

加藤庸子氏は浜松日本語ネットワークを代表し、またNPO法人浜松日本語日本文化研究会代表として日本語学習支援について提言した。浜松日本語ネットワークは、浜松市内の公立小中学校で外国人児童生徒のために放課後学習支援をしている4団体(そらの会、龍の会、ジャボラNPO、にほんごNPO)が、学習支援活動を共同して推進していくために2007年に結成した。

浜松市教育委員会による外国人児童生徒への学習支援としては、教員加配、支援員の配置、就学サポーター配置、指導相談員の学校訪問、はまっこ教室(日本語初期指導)、学習支援団体への助成などがある。

しかし現在の支援体制には次のような問題点がある。①市内全地域がカバーされていない、②経験を積んだ指導者が不足、③子どもに対する日本語教育の知識が不足、④ボランティアへの大きな依存、⑤学校との連携が困難、⑥関連団体間の連携不足、⑦保護者の協力が得られない、といった諸点である。

また、子どもの側にも次のような問題点がある。①入学前に集団生活を経験していない、②母語の発音が不十分、③文字言語が身につけていない、④学習意欲が乏しい、⑤自宅学習の習慣がない、⑥勉強を見てくれる人がいない、⑦日本の学校文化に溶け込めない、といった点である。そのため、日本語での日常生活には困らないが、学習言語が身に付かな

いという状況が生じ、授業についていけず学校を休みがちになったり、やめてしまったりする子どもが出てくる。さらには非行に走る可能性も高くなる。

そこで、具体的には次の3つの解決策の導入が求められる。すなわち、①初期日本語集中教室、②地域による放課後学習支援、③親への日本語・日本文化教育である。初期日本語集中教室では、教員免許を持つ日本語教師とバイリンガルの指導員が、基礎的な日本語や学校文化を指導し、学校にうまく適応できるようにする。学校での取り出し授業や就学サポーターによる入り込み支援を充実させた上で、放課後補充教室での学習支援を進める。そこでは地域住民やNPOのサポートによって学習面の補充を行う。保護者が日本語を学習するか否かは、子どもの日本語学習の動機にも直接的に結びつくため重要である。

(2) 医療・保健について

栗倉敏貴氏（浜松外国人医療援助会（MAF Hamamatsu）会長）は1996年に浜松外国人医療援助会を設立し、多くのボランティアの協力のもとに毎年1回の外国人無料検診会を実施してきた。この活動を通じて捉えた課題について、浜松市に対する政策提言を5項目にまとめた。

①外国人市民に対する、基本的な生活基盤としての医療・保健・福祉の行政サービスの整備

外国人のなかにも、医療・保健・福祉の行政サービス受給に格差が見られる。地域社会の中で経済・産業の発展に相応の役割を担う外国人市民に対し、基本的な生活基盤を守る観点から、日本人市民と同様に医療・保健・福祉の行政サービスが提供されるべく情報提供・環境整備が必要である。

②外国人労働者の社会保険加入率上昇に向けた、行政による関連企業への強い指導

2008年度より、医療費抑制の観点から健康保険加入者の予防検診の実施体制が強化される。また、外国人市民も高齢化により心疾患や脳血管障害の危険度が高まる傾向にある。行政当局は、関連企業に対し、外国人の社会保険加入率向上について強い指導力を発揮することが望まれる。

③外国人市民が活用できる生きた事業としての、保健所における健診の拡充

制度として保健所での健診が実施されていても、現実には言葉の壁、休暇取得の困難等により活用できない外国人が多い。疾病の早期発見は重症化を防ぐとともに、医療費未払いなどの問題を未然に防ぐことにもつながる。日曜日の実施や積極的な広報等を含め、実際に活用できる制度としての運用が求められる。

④外国人学校に通学する児童に対する健康診断の実施

外国人学校は学校保健法の適用外になっているため、外国人学校の子どもたちに対する行政当局による学校検診は実施されていない。浜松外国人医療援助会は外国人学校に通学する子どもたちの健診を実施しているが、医療面の問題の発見のみならず、生活習慣全体に関する課題も多く発見され、保護者からの要望も増している。定住化が進むなか、将来の浜松市を担う青少年の健全育成の観点から、外国人学校に通う子どもたちに対しても学校保健法に基づく健診と同程度の健診の事業化が望まれる。⁴⁾

⑤地域の特性に基づく長期的な医療・保健・福祉計画の策定

浜松周辺における外国人市民の今後の動態については、さまざまな要因による変動の可能性があるが、地域に一定規模の外国人市民が居住する状況は今後も継続すると予想される。かれらの生活の安定のために欠かせない社会保障に関しては、長期的な視点に立った計画の策定が望まれる。国との交渉により医療・保健・福祉に関する特区となって、先進的な施策を推進することも視野に入れるべきである。

(3) ブラジル人市民からの視点

田村エミリオ氏（「ブラジル人のための日本語教室」講師／異文化を伝える会）は日本に20年近く居住し、日本語教室の講師を務めたり、日本人とブラジル人からなる劇団を主宰したりして多彩な社会活動を展開している立場から、教育、交流、通訳・相談員の3点について提言した。

教育については、大きく2つの項目があげられた。まずブラジル人労働者が円滑に就労

し、家族とともに落ち着いて生活する上で日本語習得が必要である。雇用主である職場(工場等)や派遣会社が日本語学習の場を提供すると同時に、地域では会話中心の日本語教室の充実が求められる。ブラジル人の定住化傾向を踏まえ、日本の学校における義務教育の機会をブラジル人に強く勧める一方、放課後にはポルトガル語やブラジル文化等について教える教室も設け、日本での生活に適応できる力とともにブラジルについての深い理解を養う。ブラジル人学校のみに通う子どもは将来日本社会での自立が難しいため、日本社会への適応、自立を促す教育プログラムの導入が必要である。

交流については、ブラジル人による商業施設(食料品店、雑貨店、飲食店等)を拠点とした地域的交流を図ると同時に、ポルトガル語のテレビ局も含めたマスメディアによる情報提供を促進し、日本人とブラジル人の相互理解を深めることが重要である。また、地域の公民館祭りなどの機会には、ブラジル人が出店側に加わるなど、主体的に参加できる機会を設ける。さらに日本人とブラジル人が相互の家庭にホームステイして、直接的に暮らしぶりを体験できるシステムを作ると効果的である。

通訳・相談員については、質の向上を図るため、認定制度を設ける必要がある。さらに市役所等の窓口業務に従事する通訳には、相談の受け方や専門的知識・専門用語に関する講習の機会を充実させる。

なお、浜松市砂丘自治会会長の藤原義幸氏からは、外国人が集住する市営住宅を含む自治会の現状と課題が報告された。砂丘自治会では、約1500世帯のうち約200世帯が外国人世帯となっており、ブラジル、ペルー、中国、フィリピン、インドネシアなど、国籍も多岐にわたる。現在では自治会役員にもブラジル人住民が加わり、庶務担当としてブラジル人居住者とのパイプ役になっている。防災訓練や国際ふれあい夏祭りには外国人居住者も参加するが、地域での生活に必要な情報が外国人居住者に十分に伝わっていないこともあるため、市営住宅の入居時の説明の充実が求められた。さらに、地域や企業での日本語

教育の必要性も指摘された。

5. シンポジウムの成果と課題

本シンポジウムには多文化共生に関心を持つ市民や、実際に共生活動に取り組んでいる市民など、約120人が参加した。政策提言を目的とする会だったため、浜松市および市教育委員会に働きかけた結果、副市長と教育委員会指導課副参事の出席が実現した。政策提言に対して壇上から返答する形は取らなかったが、提言内容について市および市教委が直接耳にする機会となった。

ここでは、シンポジウム後に回収したアンケート結果から参加者の属性と評価を把握した上で、いくつかの意見を紹介したい。

アンケートの回収数は85部であった。性別では、女性が58%、男性が41%、無回答1%だった。年齢は40代が26%でもっとも多く、30代23%、20代21%と続いた。居住地は浜松市が約70%、浜松市以外の静岡県内が15%だった。県外は8%で、愛知県、岐阜県、神奈川県からの参加があった。職業については、公務員が23%で多くを占め、会社員と学生がそれぞれ12%だった。

シンポジウムに対する評価についてまとめると、第1部の分析結果報告については、「わかりやすかった」が48%、「大変わかりやすかった」が28%、「普通」が14%だった。第2部の政策提言については、「わかりやすかった」が34%、「大変わかりやすかった」が28%、「普通」が14%だった。第1部、第2部とも、6割から7割の参加者が肯定的に評価していた。

しかしながら、自由記述では、シンポジウムの内容、時間配分、構成等について参考になる意見も多数寄せられた。それらの意見を紹介することが、多文化共生をめぐる問題点の理解にもつながると思われるので、以下に代表的な意見を記載する。

(1) 内容について

- ・第1部の報告は、もっと論点をまとめ、問題点を絞った方がよかった。
- ・第1部は理論やデータが多く、急ぎ足でわかりにくかった。

- ・パワーポイントの画面には、配布された報告書には掲載されていない図などがあったので、パワーポイント資料も配付してほしい。
- ・外国人の参加者もいたので、もっとわかりやすい日本語で話してほしい。
- ・データのみではなく、具体例を含んだ報告が望まれる。

(2) 時間配分について

- ・第1部の発表ではもう少しゆっくり話してもらえるとよかった。
- ・数多くの報告があったが、持ち時間が短いため、あまり掘り下げて聞けなかったのが残念だった。
- ・議論する時間をもっと確保する必要がある。

(3) 構成について

- ・第2部の提言については、誰に対する提言なのか判然としないものがあった。課題解決の主体は誰か、提案者自身は何を担うかが併せて示されれば、論点が明らかになり、もっと有益、有効、有意義だったと思う。
- ・行政側の考えや意見が聞けなかったのが残念だった。活動の役割分担をどうすればうまくいくかについて意見交換するような機会が必要。
- ・話し合われるべき内容がとてもたくさんあったように思う。市民が話しあえるこういった場を多く設け、その場に外国人の方が多く参加され、活発な話し合いができれば、具体的な解決方法が見えてくるかもしれないと感じた。

以上から明らかなように、3時間かけて行われた本シンポジウムは、分析結果報告と市民からの政策提言とで構成されるシンポジウムとしては明らかに時間不足だった。また、協働研究の成果発表の場としての位置づけにとどまらず、提言内容に対する行政側からの見解の提示やフロアとの議論にも十分な時間を振り向けるべきであった。これらの反省点を踏まえつつ、今後同様の趣旨のシンポジウムを企画する際には、双方向的な意見交換の機会の確保を心がけたい。

6. むすび

浜松市調査の学術的な発表の機会として、研究チームは2008年6月22日に立教大学で開催された第12回 Asian Studies Conference Japan (ASCJ)にて、Inclusion and Exclusion of Immigrants in Japan: A Case of Japanese Brazilian Migrants in Japan. (日本における移民の包摂と排除ー日本における日系ブラジル人の場合ー)と題したパネルを立て英語で研究成果を発表した(パネル責任者:竹ノ下弘久静岡大学准教授)。

こうして市民に対する日本語での研究成果還元と研究者に対する英語での学術的発表を終えたが、もうひとつやり残したことがあった。すなわち、調査に協力してくれたブラジル人コミュニティへの研究成果還元である。この点については、調査結果の分析作業の過程で協力してくれたホベルト・マックスウェル氏(静岡大学大学院生)の発案を受け、ポルトガル語での成果還元の機会を持つことになった。大学ネットワーク静岡、静岡文化芸術大学、静岡県の主催により、2008年10月11日に静岡文化芸術大学にて開催されたポルトガル語フォーラム「ポルトガル語でのディベートー浜松市におけるブラジル人の生活ー」がそれである。このポルトガル語フォーラムについては別の機会に詳細に報告したいと考えているが、本シンポジウムの反省点を踏まえ、ディスカッションのための時間を十分に確保した。調査結果を当事者コミュニティに還元すること自体が希である上、日本の大学がポルトガル語でのフォーラムの機会を提供し、ブラジル人が自由に意見を述べる機会を提供したのは、おそらく日本初の試みであろう。このフォーラムについては、日本語の報告書での結果報告を予定しているため、静岡県をはじめ行政機関からも注目されるものと思われる。研究チームと市民との協働研究は、外国人市民からの生の声を得て、次のステップに向けて動き始めた。

注

- 1) 調査受託者は静岡文化芸術大学(研究担当者:池上重弘)であり、浜松市国際課の了解のもとに、イシカワ・

-
- エウニセ・アケミ（静岡文化芸術大学）、竹ノ下弘久（静岡大学）、千年よしみ（国立社会保障・人口問題研究所）の3名が研究協力者として加わった。上記4名が研究チームを構成した。
- 2) 以下のURLにて公開されている。調査方法や単純集計結果については、そちらを参照。
<http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/admin/policy/kokusai/kokusaitoppage.html>
- 3) 池上重弘（研究代表）。2008.『外国人市民と地域社会への参加－2006年浜松市外国人調査の詳細分析－』静岡文化芸術大学。
- 4) 文部科学省は2009年度、国内のブラジル人、ペルー人学校を対象に、健診の実施状況など児童生徒の健康管理態勢を把握するため、全国から数校を抽出し実態調査を行う方針を固めた（静岡新聞夕刊、2008年12月8日付、第1面）。
-

市民参加型の“協働研究”

浜松市民が考える 多文化共生

～ 浜松市外国人調査をもとに～

【コーディネーター】池上重弘

(静岡文化芸術大学 文化政策学部 准教授)

参加
無料

【オープニング】主催者挨拶、来賓挨拶

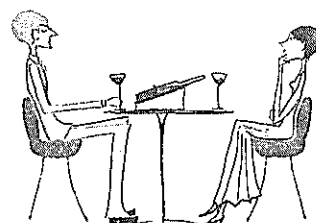
【第1部】分析結果の発表「外国人市民と地域社会への参加」

【第2部】市民からの政策提言

【会場】

静岡文化芸術大学 南176大講義室

※事前申し込み不要、当日直接会場へお越しください。

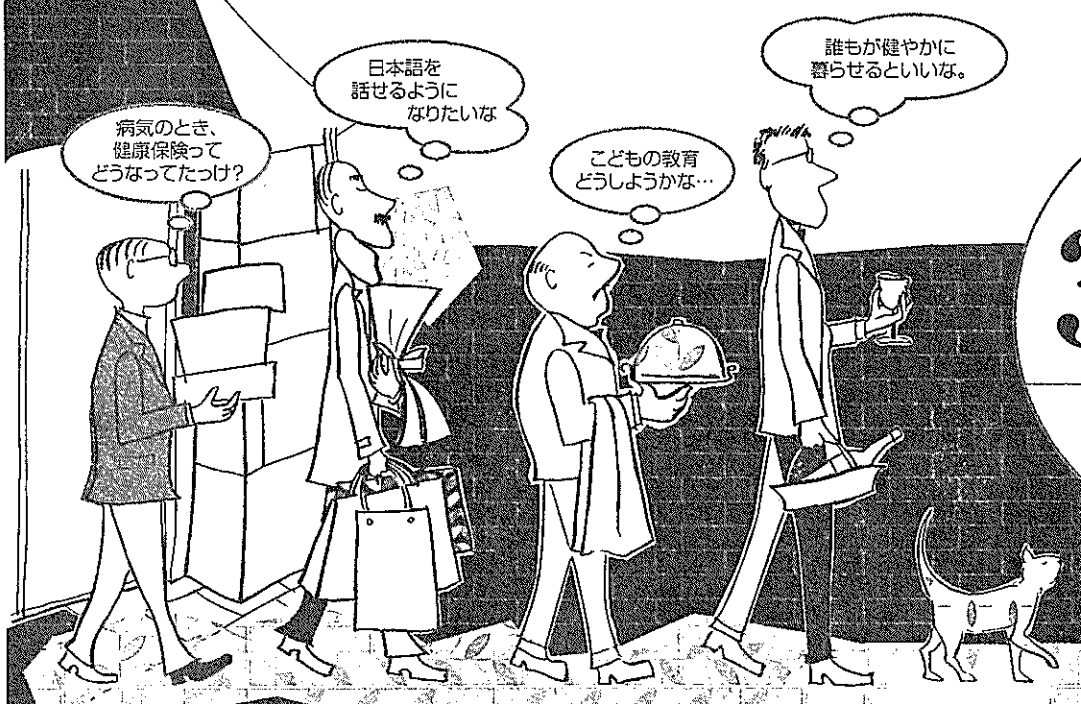


【主催】

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター

「多文化共生社会の実現に向けた

静岡県西部地域からの情報発信」研究チーム



2008.
3.23 [sun]

開催時間
14:00～17:00
(質疑応答・休憩含む)



市民参加型の“協働研究”

浜松市民が考える多文化共生
～浜松市外国人調査をもとに～

【趣 旨】

2006年度に浜松市企画部国際課より受託して実施した「浜松市における南米系外国人の生活・就労実態調査」の分析結果およびそこからの知見を広く市民に還元するとともに、日本語教育・医療や保健・地域社会・外国人市民のコミュニティなどの場面で市民活動に関わっている方々が、調査の分析結果と日頃の活動経験をもとに、多文化共生のあり方について多様な角度から政策提言する機会です。

【プログラム】

■オープニング／主催者挨拶、来賓挨拶

■第1部／分析結果の発表「外国人市民と地域社会への参加」

- ▶日本語能力の現状と日本語学習の可能性
池上重弘(静岡文化芸術大学 文化政策学部 准教授)
- ▶健康保険の加入状況と課題
千年よしみ(国立社会保障・人口問題研究所 国際関係部 第一室長)
- ▶子どもの生活環境とアイデンティティ
イシカワ エウニセ アケミ(静岡文化芸術大学 文化政策学部 准教授)
- ▶人づきあいのあり方と精神的健康
竹ノ下弘久(静岡大学 人文学部 准教授)・西村純子(明星大学 人文学部 准教授)

■第2部／市民からの政策提言

コーディネーター:池上重弘

パネリスト

- ▶日本語教育-加藤庸子氏(浜松日本語ネットワーク/NPO法人浜松日本語日本文化研究会代表)
- ▶医療・保健-栗倉敏貴氏(浜松外国人医療援助会(MAF Hamamatsu)会長)
- ▶地域社会-藤原義幸氏(砂丘自治会会長)
- ▶ブラジル人市民-田村エミリオ氏(「ブラジル人のための日本語教室」講師)

本シンポジウムは、2007年度静岡文化芸術大学文化政策学部長特別研究「多文化共生社会の実現に向けた静岡県西部地域からの情報発信」の研究成果の一部です。

◆SUAC
文化芸術
セミナー

お問い合わせ／アクセス

静岡文化芸術大学 〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号 TEL 053-457-6111(代) FAX 053-457-6123(代)

◆文化政策学部国際文化学科 池上研究室

TEL 053-457-6156

FAX 053-457-6156 E-mail ikegami@suac.ac.jp

◆企画室

TEL 053-457-6113

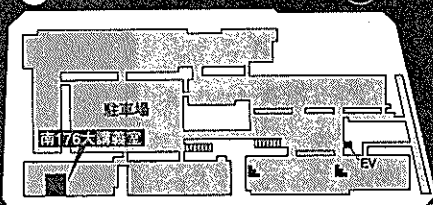
http://www.suac.ac.jp/

E-mail kikaku@suac.ac.jp

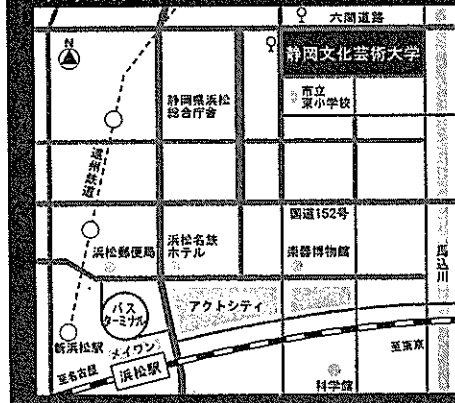
◆会場

静岡文化芸術大学
南176大講義室

1F



◆案内図



◆交通アクセス

浜松駅から、徒歩約15分。
※本学へお越しの際は、公共の交通機関をご利用ください。

◆バスをご利用の場合

遠鉄バス (10分間隔で運行しています)

浜松駅北口バスターミナル10番のりばから
出ているバスは、全て静岡文化芸術大学を
通ります。バス停「文化芸術大学」下車

浜松市循環まちバス く・る・る
(15分間隔で運行しています)

浜松駅北口バスターミナル12番のりば
「まちなか東ルート」バス停「文化芸大」下車
※大学から浜松駅へ向かうときは「まちなか西ルート」にお乗りください。

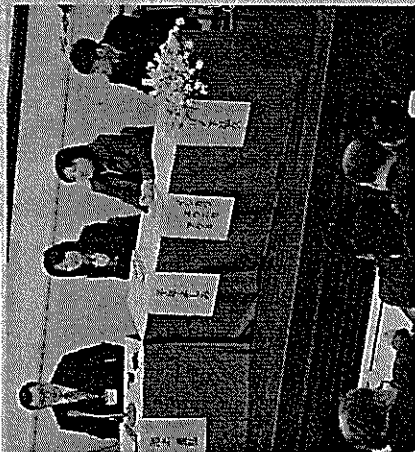
日本語学ぶ場必要

浜松で多文化共生セミナー 提言へ調査分析

二〇〇六年に行った浜松市外国人調査の結果を分析し、政策提言につなげるためのセミナー「浜松市民が考える多文化共生」（静岡文化芸術大主催）が二十三日、同市中央区の同大で開かれた。共生生活動に取り組む市民ら約百二十人が参加した。同大の池上重弘教授と四人の研究者が外国人

調査の分析結果を発表した後、多文化共生生活動に取り組む市民団体の代表者が経験や分析結果に基づいて政策提言を行った。「日本語能力の現状と日本語学習の可能性」と題して発表した池上准教授は、日本語の学習意欲のある外国人が日本語能力にかかわらず約八割に上ることを紹介した。そ

の一方で、滞年数が十年以上でも日本語能力が十分でない事例も示し、「非正規雇用の外国人は体系的な学習機会が持てていない。企業側の評価制度の導入も求められる」と結論付けた。市民代表では、日本語教育に携わる浜松日本語ネットワークの加藤博子さんが、政策提言として



外国人調査の結果を基に多文化共生について議論したセミナー
＝浜松市中区の静岡文化芸術大

▽児童生徒向けに初期日本語集中教室の設置▽保護者が日本語や日本文化を学ぶ場の保証などを示したほか、アジア出身の日本語講師田村エミリ

さんが「各地域に会話中心の日本語教室の設置を」と呼び掛けた。

感謝の気持ちを表した。式後は学校内が一般開放され、住民や卒業生ら

は思いが詰まった学びやこの別れを惜しんだ。龍山地域の生徒らは四

月からは約二十分離れた光が丘中学校にスクールバスで通う。（岡利文隆）

らは調査結果をあらためて説明。日本語の会話について、約二割が「まったくできない」か「あまりできない」と回答。また外国人登録者の約二割が健康保険に未加入などの実態を明らかにした。

パネル討論で、アジア人向けの日本語講師の田村エミリさんと浜松外国人医療援助会の栗倉敏貴会長などが、暮らしの目線からニーズを分析。市役所にアジア系人対応相談窓口を置く必要がある。「外国人が十分に医療を受けられるような特区を作ってほしい」など提言した。

（原田寛）

外国人医療特区を

文化芸術大で行政や教育改革訴え



浜松市中区中央の静岡文化芸術大で二十三日、外国人と地域の共生について研究している池上重弘教授らによるセミナー「浜松市民が考える多文化共生」が開かれ、二〇〇六年に同教授らが発表した市内の南米系外国人の生活・就労実態調査をもとに、行政や教育の改革を訴えた。セミナーで、池上教授

中1080324
(中) P.16

The Twelfth Asian Studies Conference Japan (ASCJ)

PROGRAM

*For late changes please check signs at the conference venue or see our website:
www.meijigakuin.ac.jp/~ascj*

Registration will begin at 9:15 a.m. on Saturday, June 21.

Registration: Entrance, Building No. 5.

Book Display: First floor, Building No. 5.

Sessions will be held in Building No. 5 of the Ikebukuro campus of Rikkyo University.

All rooms are equipped with projector, video, DVD player, and overhead projector.

Technical support: Room 5308, Building No. 5.

The "Ivy" Cafeteria (Building No. 5, basement) and Cafeteria No. 1 ("Daiichi Shokudō" in the main campus area across the road) will serve a variety of foods at lunchtime on Saturday. Please note that "Ivy" will stop serving lunch at 1 p.m. on Saturday. There are few alternatives available in the immediate vicinity. Food can also be bought from nearby convenience stores. No food or refreshments can be consumed in the classrooms in Building No. 5, but there are seats outside the building and in the lounge across from the "Ivy" Cafeteria.

PROGRAM OVERVIEW

SATURDAY JUNE 21

| | |
|-------------------------|--|
| 9:15 – | Registration (Entrance, Building No. 5) |
| 10:00 A.M. – 12:00 NOON | Sessions 1–6 (Building No. 5, 2nd floor, 3rd floor) |
| 12:00 NOON – 1:15 P.M. | Lunch break |
| 1:15 P.M. – 3:15 P.M. | Sessions 7–12 (Building No. 5, 1st floor, 2nd floor, 3rd floor) |
| 3:30 P.M. – 5:30 P.M. | Sessions 13–18 (Building No. 5, 1st floor, 2nd floor, 3rd floor) |
| 5:45 P.M. – 6:30 P.M. | Keynote Address: Elizabeth Perry, "Chinese Conceptions of 'Rights': From Mencius to Mao—and Now" (Building No. 5, Room 5121) |
| 6:40 P.M. – 8:20 P.M. | Reception (Daiichi Shokudō = Cafeteria No. 1) |

SUNDAY JUNE 22

| | |
|-------------------------|---|
| 9:15 – | Registration (Entrance, Building No. 5) |
| 9:30 A.M. – 9:50 A.M. | ASCJ Business Meeting (Building No. 5, Room 5322) |
| 10:00 A.M. – 12:00 NOON | Sessions 19–24 (Building No. 5, 3rd floor) |
| 12:00 NOON – 1:00 P.M. | Lunch break |
| 1:00 P.M. – 3:00 P.M. | Sessions 25–30 (Building No. 5, 3rd floor) |
| 3:15 P.M. – 5:15 P.M. | Sessions 31–36 (Building No. 5, 3rd floor) |

Session 35: Room 5305

Globalization, Enculturalization, and Music Education

Chair/Organizer: Wai-Chung Ho, Hong Kong Baptist University

- 1) Yuri Ishii, Yamaguchi University

Musical Identity in School Education in Asia: Between Universal Musical Language and Local Identity

- 2) Chris Mau, University of London, School of Oriental and African Studies

Foreigners and Japanese Learning Traditional Japanese Music

- 3) Wing-Wah Law, University of Hong Kong

Sociopolitical Change, Global Culture, and Music Education in Hong Kong

- 4) Wai-Chung Ho, Hong Kong Baptist University

Dynamics and Dilemmas of Introducing Popular Culture into Music Education in Mainland China

Discussant: Mari Shiobara, Tokyo Gakugei University

Session 36: Room 5321

Inclusion and Exclusion of Immigrants in Japan: A Case of Japanese Brazilian Migrants in Japan

Chair/Organizer: Hirohisa Takenoshita, Shizuoka University

- 1) Shigehiro Ikegami, Shizuoka University of Art and Culture

Latin-American Foreign Residents in Hamamatsu City and Their Proficiency in Japanese Language as a Key to Social Integration

- 2) Yoshimi Chitose, National Institute of Population and Social Security Research

Health Insurance Coverage and Foreign Residents in Hamamatsu City

- 3) Eunice Akemi Ishikawa, Shizuoka University of Art and Culture

Japanese-Brazilian Children's Education and Their Identity: A Case Study in Hamamatsu City

- 4) Hirohisa Takenoshita, Shizuoka University

Ethnic Solidarity and Social Support among Japanese Brazilian Migrants: Social Networks and Psychological Distress

Discussant: Chikako Kashiwazaki, Keio University

移民政策学会

iminseisaku.org



第2回研究大会は、2009年5月16日
(土)・17日(日)に
明治大学で開催されます。
詳細はこちらへ。

Contents

- [新着情報](#) (学会の活動についての最新ニュースはこちら)
- [大会・研究会](#)
- [学会誌『移民政策研究』](#)
- [学会記事](#) (学会の活動に関する記事・出版物)
- [学会趣旨](#)
- [学会規約](#) (2008年5月17日施行)
- [学会役員](#)
- [入会案内](#)
- [お問い合わせ](#) (学会の内容、活動に関する問い合わせ先)

Copyright (C) 移民政策学会 Iminseisaku Gakkai 2008. All rights reserved.

大会・研究会

2009年度の大会・研究会

2009年度年次大会

日時:
2009年5月16日(土)13時～17時30分 (懇親会 18時～20時)
2009年5月17日(日)10時～17時

場所:
明治大学(駿河台キャンパス) リバティタワー(東京都千代田区神田駿河台)

◆◆◆プログラム◆◆◆

報告者の御名前の右にある「抄録」をクリックすると、pdfファイルの報告抄録がダウンロードできます。

ミニシンポ1

5月16日(土)(13時～15時半) リバティタワー 1153教室
テーマ「最近の入管政策の国際比較－韓国・ドイツ・フランス－」
司会 小井土彰宏(一橋大学)

1. マネジメント化する韓国の移民政策
宣元錫(中央大学) 抄録
 2. ドイツの移民政策－統合と選別
前田直子(獨協大学大学院) 抄録
 3. フランスにおける2007年移民法－フランス語習得義務から
DNA鑑定まで－
鈴木尊紘(国立国会図書館 調査及び立法考査局) 抄録
- コメンテーター 野村佳世(一橋大学大学院) 抄録

ミニシンポ2

5月16日(土)(13時～15時半) リバティタワー 1156教室
テーマ「日本の留学生政策の再構築:『知的国際貢献』から『高度人材受入れ推進』へ」
司会 武田里子(東京外国語大学)

1. 「留学生30万人計画」の意味と課題
栖原暁(東京大学) 抄録
 2. 留学生政策の比較:アジアのキー・プレーヤー国(シンガポールと
韓国)の政策動向
太田浩(一橋大学) 抄録
 3. 留学生の就職支援－留学生相談現場からみた現状と課題－
原田麻里子(東京大学) 抄録
- コメンテーター 石井由香(立命館アジア太平洋大学)

総会 5月16日(土)(16時～17時半) リバティタワー 1012教室

懇親会 大学会館3F 第1・2会議室(リバティタワーの隣) 18時～20時

自由報告部会

5月17日(日)(10時～12時半) リバティタワー 1134教室
司会 橋本直子(IOM)

1. 外国人と共生するローカル・シティズンシップの課題
－長野県X地域を事例として
能勢桂介(立命館大学大学院) 抄録
2. 「ホームレス」を生きる移民ドメスティック・バイオレンス被害者
－住まいの確保問題を中心とした事例報告
山田佳苗(一橋大学大学院) 抄録
3. 韓国における国際結婚女性移住者に対する政策の展開と
その変容について
宋嶺磐(立命館大学大学院) 抄録
4. 外国人の退去強制における拷問等禁止条約のノン・ルフールマン原則の活用
安藤由香里(内閣府国際平和協力本部事務局研究員) 抄録

緊急ワークショップ

5月17日(日)(10時～12時半) リバティタワー 1136教室
テーマ「雇用不安と在留管理(仮題)」
コーディネーター:井口泰(関西学院大学)
(報告者未定)

シンポジウム

5月17日(日)(13時半～17時) リバティタワー 1011教室
テーマ「日本の難民政策は変わっているか」
コーディネーター 滝澤三郎(東洋英和女学院大学・前UNHCR)

1. 日本の難民政策－過去・現在・未来
水上洋一郎(日韓文化協会:入管OB) 抄録
2. 難民の定住に向けて
久郷ボンナレット(元カンボディア難民) 抄録

3. 難民受け入れ態勢等に関して
軽部洋(難民事業本部) 抄録
4. 難民を受け入れる、ということーグローバル化時代における「文明国の使命」?
阿部浩己(神奈川大学) 抄録
- コメンテーター:
山神進(立命館アジア太平洋大学:入管OB)
吹浦忠正(元難民を助ける会)
渡邊彰悟(弁護士)

2008年度の大会・研究会

第2回研究会

日時:
2009年3月21日(土)14時～17時

場所:
早稲田大学(東京・早稲田キャンパス)15号館03教室

◆◆◆プログラム◆◆◆

報告題目の右の「抄録」をクリックすると、pdfファイルの報告抄録がダウンロードできます。

報告者:
林 幹(行政書士・成蹊大学法科大学院)
「在留資格『技術』『人文知識・国際業務』と『企業内転勤』の矛盾と運用上の混乱」 抄録

松岡洋子(岩手大学)・足立祐子(新潟大学)
「ドイツ・韓国・日本の移住外国人に対する社会統合施策言語施策を中心として」 抄録

呉 泰成(一橋大学大学院)
「韓国における国籍政策の変容 - エスニック移民と外国人配偶者を中心に-」 抄録

佐々木 てる(早稲田大学)
「日本の国籍制度と重国籍の可能性について」 抄録

司会:
池上重弘(静岡文化芸術大学)

第1回研究集会

日時:
2008年12月13日(土)13時～18時20分 (懇親会 18時半～20時)

場所:
名城大学天白キャンパス 共通講義棟北・名城ホール(愛知県名古屋市)

◆◆◆プログラム◆◆◆

報告題目の右の「抄録」をクリックすると、pdfファイルの報告抄録がダウンロードできます。

1 部会報告:共通講義棟北1階 13時～15時

1 「多文化共生政策における実務家養成」 N102教室

石河久美子(日本福祉大学)愛知県多文化ソーシャルワーカー養成講座 抄録

杉澤経子(東京外国語大学)多文化社会コーディネーター養成プログラムのねらい・課題・展望 抄録

志渡澤祥宏(全国市町村国際文化研修所)JIAM 多文化共生関係研修について 抄録

司会:甲村洋子(愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室)

2 「入管政策における『非正規滞在者』」 N103教室

西中誠一郎(ジャーナリスト)難民在特の変遷とその背景 抄録

鈴木江理子(立教大学)非正規滞在者をめぐる社会構造の変化と在留特別許可 抄録

児玉晃一(弁護士)在留特別許可を巡る裁判例の傾向 抄録

司会:村下博(大阪経済法科大学)

3 「比較移民政策(西欧・北米)」 N104教室

八幡耕一(名古屋大学)放送政策および放送法の国際比較 —移民国家から学ぶ日本の方向性— 抄録

菅原真(名古屋市立大学)フランス1789年「人および市民の権利宣言」の「市民」は外国人を排除する観念か？ 抄録

司会:柄谷利恵子(関西大学)

4 「比較移民政策(アジア)」 N105教室

山田陽子(名古屋市立大学大学院)中国帰国子女と中国人就学生 ―地域支援と日本語習得― 抄録

中尾美知子(岩手県立大学) 韓国における国際結婚の実態と支援政策 抄録

李賢珠(筑波大学大学院) 研修生制度の受容と変容 ―日本から韓国への政策移転― 抄録

司会:駒井洋(中京女子大学)

II シンポ:共通講義棟北1階 名城ホール(N101) 15時半～18時20分

「外国人政策の改革における地方自治体の役割と課題」

坂井嘉巳(美濃加茂市経営企画部多文化共生室)

北脇保之(東京外国語大学)

佐久間孝正(立教大学)

後藤美樹(多文化共生リソースセンター東海・フィリピン人移住者センター)など

コーディネーター 井口泰(関西学院大学)

懇親会 タワー75 15階 レセプションホール 18時半～20時

第1回研究会

■日時:
2008年9月28日(日)14時～17時

■場所:
立教大学池袋キャンパス(東京)
太刀川記念館3階多目的ホール

◆◆◆プログラム◆◆◆

報告者:

池上重弘(静岡文化芸術大)

「ブラジル人の生活就労実態と社会統合の課題
―静岡県と浜松市における質問紙調査から―」

平野裕子(九州大)

「EPAスキームにおける看護師導入の可能性と課題
―フィリピン及びインドネシアにおける看護関係者へのインタビュー調査から―」

司会:

山本かほり(愛知県立大)

設立総会・第1回研究大会

■日時:2008年5月17日(土) 13:00～17:30
(懇親会18:00～20:00)

■場所:東洋大学・白山キャンパス

◆◆◆プログラム◆◆◆

13:00～14:30:設立総会

14:30～17:30:第1回研究大会

■基調講演

「なぜ移民政策なのか―移民の概念、入管政策と多文化共生政策の課題、移民政策学会の意義―」近藤敦(名城大学)

■記念シンポジウム「日本における移民政策の課題と展望」

司会:渡戸一郎(明星大学)



1. 外国人政策の改革と新たなアジアの経済連携の展望—入管政策と統合政策を基盤として—井口泰(関西学院大学)
 2. 「統合政策の構築に向けて」山脇啓造(明治大学)
 3. 「日本における外国人教育政策の問題と課題」佐藤郡衛(東京学芸大学)
 4. 「難民政策の推移—NGOから見た10年間—」石川えり(難民支援協会)
- 18:00～20:00:懇親会(2号館16Fスカイホール)



Debate em Português

ポルトガル語でのディベート

A vida dos brasileiros em Hamamatsu

浜松市におけるブラジル人の生活

Local : Universidade de Arte e Cultura de Shizuoka, Sala 280

Data : 11 de outubro de 2008 (Sábado)

Horário : 13:00 às 17:00

Entrada : Gratuita

場所: 静岡文化芸術大学 南280

日程: 2008年10月11日(土)

時間: 13:00~17:00

参加: 無料

Objetivo : Apresentação dos resultados finais da "Pesquisa sobre as condições de vida e trabalho dos residentes latino-americanos em Hamamatsu- 2006"

PARTICIPE!

Uma excelente oportunidade de debate, apresentação de idéias e opiniões da comunidade

PROGRAMAÇÃO

Parte I – 13:00 às 14:45

Eunice Ishikawa (Coordenadora)

<Palestrantes>

Shiguehiro Ikegami : Imigrantes Brasileiros em Hamamatsu - Os Resultados da Pesquisa

Eunice Ishikawa : Educação e Identidade das Crianças Brasileiras no Japão

Hirohisa Takenoshita: Solidariedade Étnica e Suporte Social

Yoshimi Chitose : As Famílias dos Nikkeis Brasileiros

Roberto Maxwell : "Escola Brasileira" ou "Escola Japonesa": Migrantes Brasileiros em Hamamatsu e Educação Escolar

Angelo Ishi (Comentários Finais)

Parte II – 15:00 às 17:00

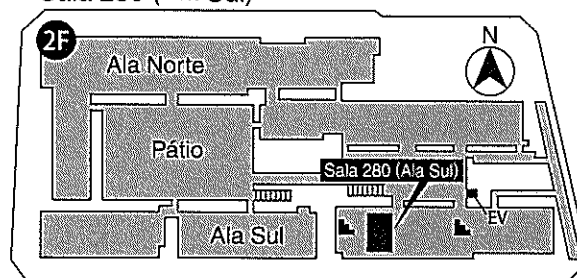
Debate e Discussão



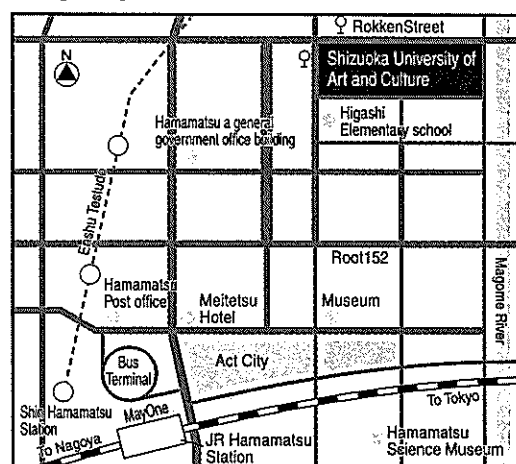
静岡文化芸術大学
SHIZUOKA UNIVERSITY
OF ART AND CULTURE

◆ Mapa (Acesso à sala 280)

Universidade de Arte e Cultura de Shizuoka SUAC
Sala 280 (Ala Sul)



◆ Mapa (Acesso à universidade.)



Acesso:

Favor utilizar transporte público.
Não haverá estacionamento disponível na universidade no dia do evento.

Da estação de Hamamatsu :

A pé : 15 minutos

De ônibus :

- a) Ônibus Entetsu (5 minutos)
Todos os ônibus que saem do ponto número 10
Descer no ponto "Bunka Gueidai Mae"
- b) Ônibus Kururu (5 minutos)
Ponto número 12 (Rota leste: HIGASHI)
Descer no ponto "Bunka Gueidai"

Local:

Universidade de Arte e Cultura de Shizuoka
Chuo-2-1-1 Naka-ku Hamamatsu-City 〒430-8533
Tel 053-457-6111 Fax 053-457-6123

Contatos:

Eunice Akemi Ishikawa
Departamento de Cultura Internacional
Tel/fax 053-457-6149
E-mail eunice@suac.ac.jp

主催 sponsor : 大学ネットワーク静岡

The Network of University in Shizuoka

静岡文化芸術大学

Universidade de Arte e Cultura de Shizuoka

静岡県 Governo Provincial de Shizuoka

Debate em Português

ポルトガル語でのディベート

A vida dos brasileiros em Hamamatsu
浜松市におけるブラジル人の生活

aviso

Exposição de Fotos (写真展)

Brasileiros no Japão, Japoneses no Brasil

100 Anos em Fotos - Do Passado ao Futuro

3 a 13 de outubro de 2008 11:00 às 19:00

Universidade de Arte e Cultura de
Shizuoka (Hamamatsu)
Galeria Oeste (Térreo)
Entrada Gratuita